

第17回

「未来を強くする 子育てプロジェクト」のご紹介

「未来を強くする子育てプロジェクト」では、
「子育て支援活動の表彰」と「女性研究者への支援」の
2つの公募事業を柱として、
すこやかな子育てと夢のある未来づくりを応援しています。

子育て支援活動の表彰

より良い子育て環境づくりに取り組む個人・団体を募集します。
各地域の参考になる特徴的な子育て支援活動を社会に広く紹介し、他地域への普及を促すことで、子育て環境を整備し、子育て不安を払拭することを目的としています。



女性研究者への支援

育児のため研究の継続が困難となっている女性研究者および、育児を行いながら研究を続けている女性研究者が、研究環境や生活環境を維持・継続するための助成金を支給します。人文・社会科学分野における萌芽的な研究の発展に期待する助成です。



目次

- p. 2 「未来を強くする子育てプロジェクト」のご紹介
- p. 3 ごあいさつ
- p. 4 講評
- p. 6 子育て支援活動の表彰
- p. 15 女性研究者への支援





ごあいさつ

高田 幸徳

住友生命保険相互会社
取締役 代表執行役社長

このたびの令和6年能登半島地震により被災された皆さまに謹んでお見舞いを申し上げます。

1日も早く日常を取り戻していただけることを祈念しております。

さて、住友生命では、「社会公共の福祉に貢献すること」を創業以来不変のパーパスとしており、その実現に向け果たすべきミッションとして、「サステナビリティ経営方針」を定めています。

このミッションの実現に向けて、グループ全体の2030年にありたい姿を「ウェルビーイングに貢献する『なくてはならない保険会社グループ』」と定めて事業を進めており、社会貢献の分野では、健康増進、子育て支援、地球環境の保護といった重要な分野に注力し、積極的な取り組みを行っています。

そのなかで、「未来を強くする子育てプロジェクト」は、子育て支援事業の重要な一翼を担っております。2007年に当社の創業100周年記念事業としてスタートし、おかげさまで、今回、第17回目を迎えました。

この2023年度は、新型コロナウイルスの感染症法の位置づけが5類へ移行したことなどに伴い、社会経済活動が再び活発化した1年となりました。

本プロジェクトにおいても、子育て支援活動に取り組まれている皆さまからは、「人々が集える場づくりやリアルイベントの開催に取り組みたい」といった希望が数多く聞かれ、女性研究者の皆さまからは、「海外でのフィールドワークを再開したい」といった前向きな研究計画が寄せられるなど、環境の変化を実感するとともに、プロジェクトに取り組む意義や使命を改めて強く認識いたしました。本プロジェクトが、将来を担う子どもたちや、それを支える皆さまの取り組みを、少しでも後押しするきっかけになることを願っております。

住友生命は、引き続き、ウェルビーイングな社会の実現に向けて全力を注ぎ、すこやかな子育てと夢のある未来づくりに向けた応援活動に取り組んでまいります。

選考結果

第17回「未来を強くする子育てプロジェクト」では、2023年7月から9月までの間、「子育て支援活動の表彰」「女性研究者への支援」の2部門の募集をいたしました。「子育て支援活動の表彰」には183組、「女性研究者への支援」には114名のご応募をいただきました。選考委員による審査を経て各部門の受賞者が決定しました。

子育て支援活動の表彰

応募数 **183** 組 | 表彰数 **12** 組

- 内閣府特命担当大臣賞 / スミセイ未来大賞の1組に授与
- 文部科学大臣賞 / スミセイ未来大賞の1組に授与
- スミセイ未来大賞 / 2組
- スミセイ未来賞 / 10組

女性研究者への支援

応募数 **114** 名 | 表彰数 **10** 名

- スミセイ女性研究者奨励賞 / 10名

講 評



選考委員長

汐見 稔幸

東京大学名誉教授、
白梅学園大学名誉学長

子

子育て支援の大事な視点として、一つは、支援者が何をしたいかではなく、支援が必要な人のニーズに応えること。今年はニーズを細やかに捉えた支援が多かったことが印象的でした。もう一つは、ウェルビーイングを実現するために、社会をどう変えていくか。地縁血縁が失われつつある中で、現代的な縁作りに取り組む活動がいくつか見られました。これらの子育てニーズと新しい縁がつながる、新たな支援モデルの芽生えを感じました。

女性研究者には、グローバル化で発生している新たな社会課題を細かく捉え、それを一つ上の俯瞰した観点から研究しようとする試みが見られました。また、これからの世界では「当事者性」が重要になり、やがてインクルーシブな社会が具体化されていくと考えられますが、こうしたテーマも多く見られました。社会の土台となる人文社会科学分野の学問に、このような新しい視点が出ていることを心強く感じました。



選考委員

大日向 雅美

恵泉女学園大学学長

ス

ミセイ女性研究者奨励賞は研究姿勢・研究内容と生活の困窮度から選考させていただいておりますが、今年は従来に増して研究姿勢に卓越した傾向がみられました。

昨今、女性活躍推進が言われていますが、人文社会科学領域の研究を続けていく困難度は、依然として変わっていません。しかし、それを言い訳にせず、乗り越えていくバイタリティを持った研究者がたくさんいらっしゃいました。

女性が社会的に力をつけてきた背景には、結婚や子育てによって自分の生き方やキャリアを捨てないという女性たちの意識の変化があることが考えられます。しかも、それを貫くことが容易ではないなかで、信じる道を諦めることなく、しなやかに強靱に生き抜こうとしている女性研究者の皆さまの姿に、明るい一条の光を見る思いでした。





選考委員

奥山 千鶴子

認定NPO法人
びーのびーの理事長

この4月にこども家庭庁が発足、こども基本法が施行されるなか、今回は子どもの主体性や権利を守るという視点を大事にしようと選考に臨みました。

新しい課題に向き合う若い活動団体が多い一方で、本プロジェクトの初期にご応募いただいた団体が再挑戦されるケースもありました。選考では、まずは活動の実績、その次に、新しい可能性を感じる活動と、二つの視点のバランスを考慮しながら進めました。

受賞された皆さまには、当事者のニーズに応じて、外部の多様なノウハウを持つ方々との連携を進め、当初の自分たちの支援内容にとどまらず、活躍の幅を広げている活動が多かった印象です。

今回、残念ながら選外となってしまった皆さまにも、素晴らしい活動がたくさんありましたので、再挑戦していただけたとうれしいです。



選考委員

米田 佐知子

子どもの未来サポートオフィス
代表

新型コロナの流行下で、子どもや子育て中の保護者を孤立させないために、SNSや動画配信サイトなども活用して新しい形態を模索しながら継続してきた活動が、5類移行を経て、さらに新しい展開へ動き出す様子がうかがえました。リアルに戻すことが可能となる一方で、コロナ渦中に新たに生まれたニーズを踏まえて、アウトリーチと集合、対面とオンラインなど、併用した形態の模索が始まっており、より効果的な支援が創出されるのではないかと期待を感じます。

また、離島や地方では、担い手や社会資源が少ないなかで、1つの団体がハブとなって、さまざまな関係者・機関が連携し、総合的な支援を実現している様子が、特徴的でした。それが、近隣地域にも波及し支援が広がっていることは素晴らしいかったです。地方の子ども・子育て支援は、大切なテーマであることを再認識しました。



選考委員

角 英幸

住友生命保険相互会社
取締役 代表執行役専務

昨年5月に新型コロナウイルス感染症の法律上の位置づけが変更され、全国各地で数多くのイベントが再び開催されるようになりました。大変な状況が長らく続きましたが、コロナ禍を経て、デジタル化の加速等により、リモートでの会議やイベント開催も可能となるなど、私たちの生活や社会にはさまざまな変化がもたらされました。

今年度は、「子育て支援活動」183組、「女性研究者」114名と、多数のご応募をいただけたことに感謝申し上げます。

応募内容を拝見し、全国各地で展開される子育て支援の情熱と行動力に深く感動いたしました。また、コロナ禍にあっても、研究者の皆さまが思いを強く持ち粘り強く活動され、前向きに課題解決に取り組む姿勢を感じることができました。本プロジェクトが社会において「すこやかな子育てと夢のある未来づくり」に寄与する一助となることを期待しています。

受賞団体のご紹介

p.8

スミセイ未来大賞・
内閣府特命担当大臣賞



鹿児島県

特定非営利活動法人
親子ネットワークがじゅまるの家

p.9

スミセイ未来大賞・
文部科学大臣賞



沖縄県

名護市学習支援教室ぴゅあ

p.10

スミセイ未来賞



山形県

特定非営利活動法人 With優

p.10

スミセイ未来賞



新潟県

特定非営利活動法人
桂公園こどもランド

p.11

スミセイ未来賞



神奈川県

特定非営利活動法人
キーパーソン21

p.11

スミセイ未来賞



兵庫県

一般社団法人 神戸みらい学習室



p.12

スミセイ未来賞



神奈川県

特定非営利活動法人
子どもセンターてんぼ

p.12

スミセイ未来賞



宮城県

認定特定非営利活動法人
こども∞感ぱにー

p.13

スミセイ未来賞



大阪府

NPO法人
里親子支援機関 えがお

p.13

スミセイ未来賞



東京都

特定非営利活動法人
しゅわえもん

p.14

スミセイ未来賞



徳島県

特定非営利活動法人
徳島の子育てに伴走する会 マチノワ

p.14

スミセイ未来賞



愛知県

特定非営利活動法人
名古屋市里親会こどもピース

スミセイ未来大賞・ 内閣府特命担当大臣賞

鹿児島県

大島郡徳之島町

特定非営利活動法人 親子ネットワークがじゅまるの家

「子宝の島」で活動を開始

徳之島は3つの町で構成され、そのいずれも合計特殊出生率が高く、「子宝の島」と呼ばれています。子どもが多い土地柄ということもあり、周囲の人々は子育てに協力的です。しかし、親世代の子育てとの感覚の違いにより、ストレスを感じている母親はいました。また、転勤等による転入者も多く、地域のネットワークに入れず、孤立してしまう母親たちもいました。このような、地域での子育て支援のニーズを感じたことが活動を始めたきっかけです。

活動の幅を広げています

「がじゅまるの家」は開始当初は、仲間同士で立ちあげた子育てサークルでした。自分たちの子育てが終わると、地域の子育てを支援する必要性を感じ、「親子のつどいの広場」を開設しました。そこに母親たちが集まるようになると、さまざまな要望が出てきます。そのニーズに応えるうちに、病児保育、企業主導型保育園の開設、相談支援事業と事業が増えていきました。今では、子ども第三の居場所、不登校支援、子ども食堂へとさらに活動の幅を広げています。

近隣諸島や本土への展開

2020年には、妊娠相談窓口「にんしんSOS」を開設しました。当初は奄美地域だけの予定でしたが、助成元の財団からの要請で、県内全域をカバーすることになりました。これ以外にも、県内の子育て支援機関との連携が深まりつつあり、近隣の島々や、本土での活動も視野に入れています。

「子宝の島」で
島民のニーズに応じた
多様な子育て支援を展開



代表者 野中 涼子

活動開始年月 2006年10月

スタッフ数 18名

受賞の言葉

毎年、受賞した活動を見ては、まだまだ足りないと思いつつながら、本プロジェクトへの応募を悩んでいました。コツコツと活動を広げ、今回、やっとたどり着けた！と、光栄に思っています。ニーズを実現し、皆さんに喜んでもらえることがパワーになっています。『子宝の島 徳之島』を支える「がじゅまるの家」であり続けるために、今後も活動していきます。

スミセイ未来大賞・ 文部科学大臣賞

沖縄県

名護市

名護市学習支援教室 ぴゅあ

沖縄県北部の進学状況

2010年代前半、名護市の高校進学率は県内でも高いとは言えない状況でした。塾などに行かせる余裕のない生活困窮世帯が多く、意欲や能力がある生徒でも、学びの機会を奪われている状況にありました。この状況を憂慮した行政職員の呼びかけにより、大学と行政で話し合いが持たれ、生活困窮世帯の中学生を対象とした学習支援活動「名護市学習支援教室ぴゅあ」が立ち上がりました。

大学と行政の連携事業

名桜大学はボランティア活動が盛んで、学生たちは地域でさまざまなボランティアを展開しています。しかし、大学と学生だけの力では、生活困窮世帯の生徒への直接的なアプローチは難しく、行政と連携することがより直接的な支援につながりました。また、活動の中には学生だけではカバーしきれない部分があり、そこを大学の教員や行政職員の方々が補ってくれることで、スムーズな運営と支援が可能となりました。

大学生ボランティアが活躍し、 子どもたち一人ひとりに寄り添う

学習支援は名桜大学の教室で行われ、運営は学生が中心的に担っています。運営方法や教え方などは、先輩たちから引き継いだノウハウを改善しながら活用しています。生徒とのマッチングを大切にしており、学習の進み具合や、特徴などをまとめたシートを作成し、一人ひとりに丁寧に対応しています。身近に大学生がいることで、生徒たちは中学卒業後のイメージが湧き、高校進学へのモチベーションにもつながっています。

大学と行政が連携する、
大学生ボランティアによる、
生活困窮世帯の中学生への
学習支援活動



代表者 嘉納 英明

活動開始年月 2013年5月

スタッフ数 58名

受賞の言葉

ぴゅあの活動は、11年目を迎えます。これまでの地道な活動が評価され、「スミセイ未来大賞・文部科学大臣賞」を頂けたことを学生や関係者と共に素直に喜びたいです。大学の教室(会場)の他に、市内の2つの中学校にも出向き、アウトリーチ的な活動を進めています。ニーズに応じた地域貢献活動を今後も進めていきたいです。

スミセイ未来賞

山形県

米沢市

特定非営利活動法人 With優

生 きづらさを抱えている子ども・若者たちには、失敗しても受け止めてくれる人、新しい挑戦を支えてくれる人が必要です。私たちは、彼らが社会に一步踏み出してみようと思える場として、「失敗しても大丈夫」というスタンスでフリースクールや、カフェ、会員制の居酒屋等を運営しています。ここを巣立ち、社会で活躍する子どもたちも増えてきました。これからも、地域の人たちと共に、誰もが暮らしやすい社会を目指していきます。

代表者 白石 祥和

活動開始年月 2007年5月 スタッフ数 13名

「失敗しても大丈夫」。生きづらさを抱える子どもや若者を支えるために、地域全体をエンパワメントする



受賞の言葉 このたびは、このような名誉ある賞をいただき心から感謝申し上げます。2007年の立ち上げ以降、地域のどんな子どもも大人も居場所と役割を持てるような地域社会を目指して活動してきました。今後も、子どもや若者の声に寄り添いながら、地域の人を巻き込み、「あったらいいな」を形にしていきたいと思えます。

新潟県

十日町市

特定非営利活動法人 桂公園こどもランド

地 元の公園が老朽化で閉鎖することになり、以来、地域のボランティアが引き継いで運営しています。公園の再生もボランティアが手作りで行き、快適に過ごせるよう芝生や季節の花々を植え、子どもたちが楽しめるようゴーカートやバッテリーカーを導入。高校生ボランティアも参加し、さまざまなイベントを開催しています。口コミで評判を呼び、今では、開催日にはたくさんの親子連れで賑わうようになりました。

代表者 渡邊 真人

活動開始年月 2014年7月 スタッフ数 21名

地域の多世代ボランティアによって再生された、家族で楽しめる公園



受賞の言葉 このたびは名誉ある賞を賜り大変光栄に存じます。「家族で楽しめる公園がほしい!」という子育て家族の声を受け、シニア世代や学生ボランティア、また多くの方々にご支援いただきながら今まで走り続けてまいりましたが、今回その活動を評価いただけたことは今後の活動の何よりの支えとなります。本当にありがとうございました。

神奈川県

川崎市

特定非営利活動法人 キーパーソン21

誰 もが持つ、わくわくして動き出さずにはいられない原動力のようなものを「わくわくエンジン」と呼んでいます。この活動では、社会で活躍する大人たちをファシリテーターとして育成。「夢！自分！発見プログラム」というオリジナルプログラムを用いて、子どもたちの「わくわくエンジン」を引き出します。現在、子どもたち自身がファシリテーターを務める「ジュニアわくナビプロジェクト」も進行中です。

代表者 朝山 あつこ

活動開始年月 2000年12月 **スタッフ数** 7名

心の中にある
「わくわくエンジン」を動かして
子どもたちの主体性を引き出す



受賞の言葉 このたびは、未来につながる力強い賞を受賞することが叶い、誠に光栄に存じます。活動20年を経て、いよいよ生まれてきた子どもたち主体の「ジュニアわくナビゲーター」プロジェクトへのエールとしてありがたく頂戴し、子どもたちの『やってみたい!』ことへの実践へとつなげてまいります。

兵庫県

神戸市

一般社団法人 神戸みらい学習室

神 戸市でも、さまざまな理由で学校や塾での学習機会が失われている子どもたちがおり、特に私たちは中学生以上のこうした子どもたちに学習の機会を等しく提供しようと活動しています。講師は大学と連携し、大学生ボランティアを活用。子どもとの相性が大切なため、きめ細かくマッチングしています。行政職員が実際に現場で活動し、地域で起きていることを知ることは、速やかに制度に反映できるというメリットがあります。

代表者 佐々木 宏昌

活動開始年月 2017年8月 **スタッフ数** 15名

行政職員による子どもたちに
教育の機会を等しく提供する
学習支援活動



受賞の言葉 このたびは名誉ある賞をいただき大変光栄です。2017年より神戸市職員が中心となって困難を抱える中学生を全力で支援してきました。全国に先駆けて創設された「神戸市地域貢献応援制度」が私たちの活動を後押ししています。全国の行政職員が一市民として職務外でも地域課題に挑戦するならば、社会は大きく変わると確信しています。

スミセイ未来賞

神奈川県

横浜市

特定非営利活動法人 子どもセンターてんぼ

2 007年にNPO法人を立ち上げて、子どもシェルターてんぼ(定員男女6名)、自立援助ホームみずぎの家(定員女子6名)、居場所のない子どもの電話相談、アフターケアに取り組んできました。自分の意見を表明するのが苦手な子や、大人の意見に従ってきた子どもたちに対して、スタッフや子ども担当弁護士が丁寧に向き合い、公的機関やNPOなどと連携しながら、思いを引き出し、自分の意思で未来に踏み出せるようサポートしています。

代表者 高橋 温

活動開始年月 2005年8月 スタッフ数 20名

子どもシェルター、自立援助ホーム、
電話相談、アフターケアで、10代後半の
子ども・若者の自立を支援



受賞の言葉 私たちの活動を評価していただき、このような賞をいただいたことを大変うれしく思います。今回の受賞を励みとして、これからも、困難を抱えた子ども・若者が、少しでも心と身体を休めて、自立への道を進んでくれたらと願いながら、大人目線での支援ではなく、子ども・若者に寄り添う活動を続けていきたいと思ひます。

宮城県

石巻市

認定特定非営利活動法人 こども^{むげん}の感ばにー

東 日本大震災の支援活動を契機に遊び場(居場所)づくりが始まり、現在は年間延べ8000人が集う常設のプレーパークとなっています。ここに『不登校』の子どもも訪れることに気付き、2016年にフリースクールを開設しました。子どもが子どもらしく主体性を育める場として、プレーパークを軸に地域の人と子どもがつながる場をつくることも、『子どもの孤立』を防ぎ地域で見守られ安心して育つ地域コミュニティを再構築していきます。

代表者 田中 雅子

活動開始年月 2013年1月 スタッフ数 14名

子どもの主体性を大切に、
プレーパークとフリースクールで
子どもたちが安心して過ごせる
居場所を地域の人と共につくる



受賞の言葉 私たちの活動を評価していただいたことに心より感謝申し上げます。子どもの遊び場や居場所、『不登校』の学びの場には“地域格差”がありますが、これを少しでも軽減するために、地域の人と子どもに顔の見えるつながりが大切だと思います。子どもが成長した時に「生まれ育った石巻で子育てがしたい」と言える地域であるために活動していきます。

大阪府

門真市

NPO法人 里親子支援機関 えがお

私 たちは、フォスタリングチェンジ・プログラムのファミリーテーターの有資格者の中に里親を数名擁しており、里親、里子みんなの「えがお」のために、里親育成に特に力を入れています。2023年にはメンター活動「Satotomo」の活動から派生した、里親子情報発信アプリ「Satococo」を開発、リリースしました。また、里親や児童養護施設から巣立ったケアリーバーの方たちと連携を始めており、今後の里親活動の発展に活かしていきたいと考えています。

代表者 牧野 博子

活動開始年月 2018年7月 **スタッフ数** 5名

里親、里子みんなの
「えがお」をふやすための活動



受賞の言葉 このたびはこのように素晴らしい賞をいただき、本当に感謝しております。里親自らが里親のために立ち上げた「えがお」。設立以来無我夢中で走り続けてまいりましたが、これからも里親子の「えがお」のために、何ができるか、何が必要かを考えながら力を合わせ、活動を続けていきたいと思っております。ありがとうございました。

東京都

杉並区

特定非営利活動法人 しゅわえもん

視 覚言語である手話は独自の文法があり、第一言語を手話のろう者との会話で習得することが大事です。これが、聴覚言語が主の聞こえる親と、手話習得中の聞こえない子のコミュニケーションを難しくしているという事実もあります。私たちは、絵本の読み語りやオンライン配信ツールを活用した各種のコンテンツで、手話の習得、手話によるコミュニケーションの向上を図っており、このノウハウをさらに世の中に広げたいと考えています。

代表者 野崎 誠

活動開始年月 2005年8月 **スタッフ数** 50名

当事者による
耳の間こえない子どもや
その家族を対象とした、
手話でのコミュニケーション支援活動



受賞の言葉 この受賞を大変光栄に思います。私たちの熱意と共に育まれた成果と感じています。この受賞を通して、未来の世代へのサポートを一層充実させ、社会に貢献できることを誇りに思います。スタッフや関係の方々と協力し、子どもたちが夢を追い求める力強い未来を築くために邁進していきます。ありがとうございます。

スミセイ未来賞

徳島県

徳島市

特定非営利活動法人 徳島の子育てに伴走する会マチノワ

コ ロナ禍での孤育てをサポートしようと、SNSを活用してオンラインコミュニティを立ち上げました。徳島県内でどんどん輪が広がり、ニーズの高さを感じたため、妊婦・親子・地域の居場所「みんなのお茶の間」を開設。ここでは、参加者もスタッフも「マチの一員」とするという考えのもと、ともに悩み、時には笑顔で「親も、地域も、育ちあう。」関係を大切に、誰もが安心感を持ちながら子育てできる街を実現するため取り組んでいます。

代表者 白桃 さと美

活動開始年月 2021年1月 スタッフ数 25名

孤立孤独・産後うつに悩む
子育て中の家庭に伴走し、
居場所を通して、地域をたくさんの
人の輪でつなげる活動



受賞の言葉 第一子出産後に「産後うつ」を経験し、コロナ禍で第二子出産。孤独な育児経験をきっかけに始めた小さな活動がどんどん広がり、仲間が集まり、3年目。私たち子育て世代がつながり、支えあい、子どもが大人になった時、地域に愛着を持てるよう、これからもみんなとともに「育ちあう文化」を育てていきたいと思っています。

愛知県

名古屋市

特定非営利活動法人 名古屋市里親会こどもピース

国 が施設養育から家庭養育を優先する方針を示したことで、里親の必要性が増えています。また、最近では発達に凸凹のある子どもたちも増えてきており、子育てスキルの高い里親であっても対応が難しい場面も多く見られます。こうした状況に対応するため、私たちは、64年間の里親会としての支援経験を活かし、ピアツーピアで里親のスキルアップを図るための研修会や、子どもの権利に関する研修会などを開催しています。

代表者 奥田 初恵

活動開始年月 2021年4月 スタッフ数 17名

里子の幸せのために、
ピアツーピアで里親をサポートし、
里子の権利を擁護する活動



受賞の言葉 私たちは広く社会に里親制度について啓発し、同時に子どもたちが地域で育まれるようにと活動を広げています。今回、里子養子が日々の想いや考えを形にできるようにと応募しました。全国の里子養子家庭、関係者と一緒に子どもの意見が反映される社会になるように努めます。今回の受賞について心から感謝申し上げます。

スミセイ女性研究者奨励賞



小川 緑

筑波大学
人間系
特任助教

【研究テーマ】

嗅覚の過敏さによる
不快感の低減における
「ニオイの言語化」の有用性

内容

ニオイに対して過剰反応し、日常生活に支障をきたす者が増えている。本研究は、感覚処理感受性が高い人ほど生活環境においてニオイに対し、過剰反応する傾向があるのかを検討を行う。また、見た目などの手がかりがないニオイに対する不安感により、ニオイを強く、不快に感じる可能性がある。ニオイを言語化する能力を高めることで、不安感を低減し、嗅覚過敏および過敏により生じる不快感が低減可能か検証を行う。

受賞の言葉

このたびは榮譽ある賞をいただき、光栄に思います。思った通りに進まないのは、子育ても研究活動も同じで、どちらもうまくいかない時には全てを投げ出したいとも思うこともありましたが、今回の受賞は、挫けそうになる研究者、そして母である私への叱咤激励のように感じました。この受賞を励みに一層精進いたします。

荻田 朋子

大阪大学大学院
人文学研究科言語文化学専攻
博士後期課程

【研究テーマ】

CLD(Culturally and Linguistically Diverse)児の
保護者・支援者向け
対話テーブルの実践研究

内容

言語的文化的資源が豊かな子どもたち(CLD児)が急増しているなか、家庭や教育環境の違いによって得られる情報や支援に格差が生まれている。身近な相手に相談しにくい子育ての悩みや、似た環境の家庭と知り合う機会がないこともある。本研究では世界中のCLD児の保護者、支援者、専門家がオンラインで集まる対話の場の継続的な実践と、当事者の語りの収集を行い、その分析による気づきの外在化と教育的知見を得ることを目的とする。

受賞の言葉

このたびの受賞を大変うれしく、光栄に存じます。子どもが増えるたびに困難が増し、就学前後で受けられる子育て支援の違いに戸惑い、子育て、仕事、研究と3足の草鞋に日々苦勞していますが、本賞が大変な励みとなりました。実践で得た多様で貴重な当事者の語りを社会に還元する機会を得たことに感謝し、日々精進いたします。

スミセイ女性研究者奨励賞



酒井 絵美

東京藝術大学
未来創造継承センター
特任助教

【研究テーマ】

運指が作る音楽観
— 多様なヴァイオリン調弦に関する
文化横断的研究

内容 ヴァイオリンは、楽器構造の素朴さと持ち運びやすさから大衆的な側面を持ち、世界の広範な地域で民族楽器として根付いている。本研究では、ヴァイオリンの多様な調弦法を比較し、運指(身体)が音楽の理解(認識)に与える影響を考察することで、人と楽器の関係性を捉え直す。音楽学分野の身体性に関する研究を前進させると同時に、多様な音楽文化のあり方を発信し、今求められる多様性のある創造的な社会につなげることを目指す。

受賞の言葉 栄えある賞をいただき、心より感謝申し上げます。育児、研究、学生への指導、演奏という多面的な活動をする生活は、周りの人の理解があって成り立っており、今回の受賞を家族と恩師に一番に報告しました。子どもとの時間を大切にしながら研究成果を広く社会に還元できるよう、一層精進いたします。



佐藤 理恵子

東京大学大学院
総合文化研究科多文化共生・統合人間学プログラム
言語情報科学専攻 博士後期課程

【研究テーマ】

**医療コミュニケーションにおける
「やさしい日本語」の活用**

内容 在住外国人にとって日本語が分からなくて困る場面の第1位は病院となっている。外国人患者は家族による同伴通訳が求められることがあり、「ことばのヤングケアラー」を生む温床となることも指摘されている。こうしたコミュニケーション上の問題を解決するために、本研究では医療現場における「やさしい日本語」の活用を検討する。外国人患者が理解・同意の上で安心して治療を進められるような医療環境を目指す。

受賞の言葉 30代で大学院に進学し、研究・子育て・日本語教師の仕事を両立しています。妊娠中は体調不良で研究や仕事を中断し、出産後は時間やお金のやり繰りに悩むこともありましたが、今回の受賞で「研究を続けていいんだ」と背中を押されたような思いです。今後も研究や教育を通じて、多様な人が学び続けられるよう社会に貢献したいです。



高村(井上) 満衣

京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科
5年一貫制博士課程

【研究テーマ】

タンザニアにおける教育普及の実態と課題
学校教育中途退学者と
進学者の生活戦略

内容 本研究では、タンザニアにおける中等教育課程の無償化の普及が青少年の生活に与えた影響について分析し、学校教育が現地社会において果たす機能を明らかにする。小学生だった青年たちを追った継続的な調査により、小学校修了者、中学中退者、進学者それぞれのライフコースを比較し、彼らの生活戦略選択における合理性について明らかにする。解決すべき課題としてみなされる「途中退学者」を、より積極的な選択として捉え直す。

受賞の言葉 このたびはご選定いただき、誠にありがとうございます。夫婦ともにフィールドワークを軸とした研究者のため、互いにワンオペ育児をしながら研究との両立を図っていますが、思い通りにならないことばかりの日々です。この受賞を励みに、子どもたちとの時間も大切にしながら、研究を続けていきたいと思えます。



陳 海茵

埼玉大学
人文社会科学研究科
研究支援者

【研究テーマ】

中国の美術大学における
「現代アート」の制度的普及と
教育的実践

内容 現在、中国の現代アート市場は、米・英に次ぐ世界第三位の規模を有し、改革開放以来、現代美術家の人口も大きく増加している。本研究では、芸術社会学という立場から、中国の美術大学教育がアートの輸入と拡散をしてきた歴史的経緯と教育実践の特殊性を解明する。とりわけ、思想実験の場としての大学が表現の多様性に重要な役割を果たしてきたことに着目し、1980年代以降の美術家輩出システムとアート市場の成長の相互関係を論じる。

受賞の言葉 このたびは、栄えある賞をいただき、深く感謝申し上げます。私は1年更新の研究員と非常勤講師をしながら、子育てと博士論文の執筆を同時並行しております。就労時間の短さゆえに日中の保育園の利用もできないなかで、今回の受賞は私にとって大変大きな励みとなりました。より一層、研究と育児の両立に邁進していきたいと存じます。

スミセイ女性研究者奨励賞



中村 ひの

東京学芸大学
教育学部
非常勤講師

【研究テーマ】

「破来頓等絵巻」研究
— 遁世発心譚と時宗祖師像の
アマルガム —

内容 徳川美術館所蔵の仏教説話絵巻「破来頓等絵巻」(14世紀、重要文化財)は、従来、内容において一貫した物語や整合性を欠くと解釈されてきた。しかし本研究では一定の制作目的(意図)を有しており、遁世発心譚として理解することが可能だと立証する。その上で、本作がなぜこのような一見不可解な内容によって成立し伝わるに至ったかを読み解くことで、日本中世期の、特に鎌倉仏教と美術の関係性の様態を明らかにする。

受賞の言葉 子どもの出生とほぼ同時にコロナ禍、厳しい時期が続きました。子どもの成長とともに社会は脱コロナへ移行しましたが、子育ても研究も試行錯誤の連続です。こうした状況では「子どもの存在を前提に女性研究者を応援する賞」の存在自体が、私にとって精神的な支えでした。貴重なチャンスを十二分に生かしていきたいと思っています。



御代田 有希

東京大学大学院
新領域創成科学研究科
特任研究員

【研究テーマ】

グローバル・ガバナンスにおける
ESG投資の役割・機能：
その動態モデルの構築と検証

内容 気候変動をはじめとする地球規模課題は、国・地域を超えて知見を集積し、解決・緩和を図ることが急務である。その解決策として、ESG投資(企業に対し、環境(E)、社会(S)、コーポレート・ガバナンス(G)に配慮することを促す投資)に着目する。本研究では、政府・市民社会・市場の相互作用を視点として、ESG投資の役割・機能を考察、動態モデルを構築し、その妥当性・有効性を検証する。

受賞の言葉 複数回の挑戦の末、今回受賞することができ、本当に感謝申し上げます。諦めずに応募し続けて良かったと思います。子育てする楽しさ・喜びと共に、研究との両立の難しさを感じる日々ですが、今回の受賞により大きな励みと力強い後押しをいただきました。将来世代が希望を持てるような社会構築に資する研究を続けていきたいと思っています。



村雲 和美

筑波大学大学院
人文社会科学部研究科
日本学術振興会特別研究員(DC2)

【研究テーマ】

インドネシア人看護師の
ライフストーリー：
定住・キャリア・家族・子どもの教育

内容 これまで、日本とインドネシアの経済連携協定(EPA)で来日し、定住を考えるインドネシア人看護師のキャリア形成や、家族への思いと日本で生まれた子どもたちの教育の葛藤を、インドネシア語で実態調査を進めてきた。彼らはイスラム教徒でありながら、日本社会で定住を模索し、多文化共生社会を実現しようとしている。今後のEPAの政策の継続と日本で定住するインドネシア人看護師の増加へ貢献することが本研究の目的である。

受賞の言葉 栄えある賞に選定いただき心より感謝申し上げます。育児と研究の両立は決して容易ではなく、何度もくじけそうになりました。研究を継続してこられたのは、恩師や家族、研究に協力してくださる方々のおかげです。今回の受賞を励みとし、研究と子育てという大変得難い経験をしながら、研究を社会に還元したいと思います。



山脇 望美

人間環境大学
心理学部犯罪心理学科
専任講師

【研究テーマ】

子どもを性犯罪から守るために：
子どもへの性犯罪促進要因の解明と
必要な性教育の提言

内容 適切な性の理解は、性の問題行動や性犯罪から子どもを守ることにつながるが、現在の教育現場では十分な性教育が実施されているとは言い難い。家庭での性教育が必要との主張もあるが、適切な性教育を受ける機会の乏しかった保護者にもその指導は難しい。本研究では、性暴力加害者の子どもへの性犯罪促進要因を明らかにし、教育者や保護者に必要な性教育を提言する。この研究により、性犯罪者を生まない社会の構築につなげたい。

受賞の言葉 このたびは栄えある賞をいただき、誠にありがとうございます。子どもと過ごす時間はかけがえのないものである一方で、研究者としての今後に不安を抱いておりました。子育ての喜びと研究の両立に難しさを感じる日々ですが、今回の受賞を励みに家族との時間を大切にしながら、より一層社会に貢献できるように精進いたします。